TAMABI NEWS

Tama Art University News Magazine

vol.100

創作力を拡張する

学科を超えた授業

企業人事・卒業生に聞く 特別編

NEC／ソニー／積水ハウス／パナソニック
三菱総合研究所／アクセンチュア
文京区役所／セイコーエプソン
宝島社／ポケモン

100号記念特大号

多摩美術大学で身につけられる専門性の高さは、
15学科専攻コースそれぞれのカリキュラムにとどまりません。
学科を超えて参加・利用できる特別講義やプログラム、施設など、
知見を広げ、感覚を研ぎ澄まし、モノを見る目を鍛え、
創作力を拡張できる環境が数多く用意されています。

創作力を拡張する
学科を超えた授業

「新施設構想のための実験イベント」と銘打たれたポスター

BLUE CUBE外観

特別講義 1 現代アートを体感する

商業施設跡を活用した多摩美の新たな施設「BLUE CUBE」。その可能性を探るプレイベントとして油画・彫刻横断のパフォーマンスによる特別講義が開催されました。

表現の可能性を広げる新たな場 | 2024年11月27日

BLUE CUBEのプレイベントで分野を超えたパフォーマンスを実施

新施設構想のための実験イベント開催

八王子キャンパスに隣接する商業施設跡地、旧METROを、多摩美がリノベーション。「BLUE CUBE」という仮称のもと、美術館や多目的スペースを備えた新しい施設が構想されています。2024年11月には、この施設の可能性を探る試みとして、ふたつのパフォーマンスが上演されました。

彫刻学科・高嶺格教授の演出による「脱皮的彫刻」では、各学科から有志6人の学生が参加。石膏デッサンをしながら美大予備校・受験に抱える葛藤を独白し、体に塗られた石膏を脱皮するように抜けることで広大な空間に虚ろな坐像が出現します。

油画専攻・石田尚志教授による「反復する壁」は、映像作品『フーガの技法』とリュミエール兄弟による映像黎明期の傑作『壁の取り壊し』とともに、世界的ボイスパフォーマーの足立智美さんと学生のパフォーマンスによっての音と映像がコラボレーション。メディアミックスなパフォーマンスが展開されました。大型食品卸売専門店の痕跡を残した空間だからこそ生まれる場所の可塑性と自由。美術作品を保存・展示するために整えられたホワイトキューブとは異なるこの場所で多様な表現が交差し、新たな総合芸術の場となる可能性が示唆されています。

学科を超えてBLUE CUBEで行われた「脱皮的彫刻」と「反復する壁」の2つのパフォーマンス

場の力とパフォーマンスが引き出す学生たちの心の声

Program 1 「脱皮的彫刻」 彫刻教授 高嶺格先生

2023年にBankARTで上演した『脱皮的彫刻』をベースにしたもので、学生たちが石膏を塗り固められていく過程と、詩の朗読を上演しました。独白を担当した6名は彫刻学科以外の学科から集まっていて、彼らのように、専門分野の枠を超えて活動しようとする学生は増えています。そういった混在とグラデーションこそ、この試みの面白さだと思っています。既存の学科・領域の枠には収まりきらないエネルギーをBLUE CUBEに投入することで、何が生まれるのか。プロジェクト単位、あるいは場所単位で境界線を越え、様々な要素と触れ合うことで、BLUE CUBEが新たな象徴となる可能性を秘めていると感じています。

ユニークな場から生まれた越境的なパフォーマンス

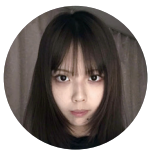
Program 2 「反復する壁」 油画教授 石田尚志先生

足立智美さんには学生の演出もお願いし、映像とクロスオーバーする作品を上演しました。映像作品のひとつは人類史上初の逆回転上映された映画『壁の取り壊し』。ふたつ目は、私が20代の頃に制作した『フーガの技法』。この作品の主題もまた「反復」や「反転」ですから、これから新たに生まれ変わる建築物を祝福するような思いがありました。その空間において、メディアを横断しつつ究極的には身体が表現の核になると確信できるようなパフォーマンスとなったと思います。BLUE CUBEは、こうした総合芸術的な考え方で様々な表現を交差させ、受け入れるだけの大きさがあるのではないでしょうか。

参加学生の声

パフォーマンスで得た刺激によって絵画表現にも広がりが出そうです

「反復する壁」にパフォーマーとして参加しました。内容は、白い服をまとった学生たちが、自分のタイミングで板を床に落とし、BLUE CUBE内の音の響き合いを作り出すという実験的な試みです。セッションしていく中で、身体的な表現の面白さを感じましたね。もともと足立智美先生の講義を受けてパフォーマンスアートには興味を持っていましたが、今回のパフォーマンスは本当に刺激的で、参加できてよかったです。普段は油画の作品を作っているのですが、パフォーマンスを経験したことで、絵画自体の表現方法にも広がりが出てきそうです。



油画 2年
小林純奈さん

特別講義 2 好奇心を拡張する

創作力を高めるためには、それぞれの学科の基礎や専門性をしっかりと身に付けることが重要ですが、可能性を広げるためには最新の情報や技術を知り視野を広げることも必要です。気になる学科の特別講義で好奇心を広げよう。

グラフィックデザイン特別講義 ｜ 2024年11月25日

『ゴジラ-1.0』制作の背景やVFXへのこだわりを語る

VFX 山崎貴 監督「映画とVFX」

『ゴジラ-1.0』でアジア映画史上初となる第96回アカデミー賞®視覚効果賞を受賞した白組チームを率いる山崎貴監督による特別講義が実現。山崎監督のルーツや歩み、『ゴジラ-1.0』制作の裏側が語られました。

「映画監督以前」のパートでは、伊丹十三監督のもとで若手ながら意見を聞いてもらえた経験などがから、現場ではスタッフ同士が対等に語り合えるスタイルが形作られたとお話されました。「映画監督として」では、山崎監督がVFXの第一人者となるまでに制作されてきた作品を紹介。「そして『ゴジラ-1.0』」では、『ゴジラ-1.0』のメイキング映像をもとにVFXを解説。水中シーンで何層にも重ねられた泡のレイヤーなど、細かなこだわりまで明かしていただきました。

参加学生の声

日本画 3年
高橋李空さん

山崎監督の“執念”を知った

日本画専攻ですが、アニメーションを制作しており、リアルとデジタルが混在した表現に興味があり、特別講義には以前から参加しています。予算内でダイナミックな映像を作る工夫やセットとVFXを融合したシーンなど具体的な技法の話もいいのですが、作家としてのありようなどが直接聞けたことが一番のヒントになり役立ちました。

グラフィックデザイン特別講義 ｜ 2023年12月4日

歴史を紐解きながら特撮技術を解説

特撮 樋口真嗣 監督「特撮の魂」

特撮映画・アニメーションの第一人者である樋口真嗣監督を招いた特別講義では、日本における特撮作品の歴史や、特殊撮影が生まれた背景や特撮技術の発展、特撮映画の政治的・社会的な役割などを、多くの資料とともに紹介。また、日本初の特撮怪獣映画『ゴジラ』の誕生、怪獣ブームの到来から衰退に至った経緯なども説明されたほか、特撮映画の1シーンをコマ送りしながら特撮技術を解説するなど、「特撮の魂」というタイトルどおりの濃厚な講義となりました。

最後は学生に対して「大学生活は純粋に自分の好きなことを追求できる尊い時間。学生のうちに恵まれた環境をフルに活用して、好きな作品制作にとことん向き合って欲しい」と温かいメッセージが寄せられました。

グラフィックデザイン特別講義 ｜ 2022年9月16日

対話を通じてアニメーションの魔力に触れる

アニメ 細田守 監督「細田守監督と話そう」

アニメーション映画監督の細田守さんを招いて実施された公開授業。3･4限に行われたグラフィックデザイン学科主催の講義では、学生が制作したビジュアル作品をもとに対話が行われました。「リアル以上の臨場感を感じることができるところが絵画やアニメーションの良いところ。気持ちを表現するのに時間をかけて表現したからこそ伝わる何かがある。まだまだ技法の特性を使って表現されていないことがたくさんあるのではないかと思うと、作ることをやめられない。アニメーションにはそういう『魔力』がある」など、細田監督のアニメ論が語られました。

5限に行われた芸術学科主催の講義では、学生が考案したアニメーションの物語について、事前募集で選ばれた学生が登壇してポートフォリオや企画案を提示。それを軸にして細田監督との対話を行いました。

劇場美術デザイン特別講義 ｜ 2022年4月23日

過去へとタイムスリップする最先端の映像美術の秘密

映像美術 NHKスペシャル「東京ブラックホール」トークイベント

NHKスペシャル『東京ブラックホール』の制作陣による特別講義「映像美術表現と最先端映像技術 ～企画提案、撮影、ポスプロまで全て見せます～」を実施。『東京ブラックホール』は俳優の山田孝之さんが過去にタイムスリップし、歴史映像に入り込みその時代の人々と交流しながら当時の東京を追体験していくという番組で、最先端の映像技術を活用して制作されています。

第一部では、企画のビジュアル化の過程や画期的なCG／VFXの手法など、すべて映像で解説しました。また、俳優の伊原六花さんが登壇し、主演の山田孝之さんからもビデオメッセージが届きました。第二部では、山下恒彦教授の映像美術ゼミに所属する学生が、過去の放送から感じ取ったことを表現した作品についてプレゼンテーションを行い、登壇者の皆さんに講評いただきました。

演劇舞踊デザイン シリーズ・特別講義2024 ｜ 2024年6月22日

演劇というメディアが持つVRとしての本質を探る

VR演劇 相馬千秋「〈身体〉から考える ――パフォーミングアーツの視点」

〈身体〉と〈アート〉の関係を紐解く演劇舞踊デザイン学科によるシリーズで、舞台芸術の分野で国際的に活躍するアートプロデューサー、キュレーターである相馬千秋さんを講師に迎えた回では、「VR演劇」の可能性について考えていきました。

世界的アーティストとタッグを組んで、国際舞台芸術祭の場でVR演劇をプロデュースした経験のある相馬さんは、小泉明郎さんと組んで製作した『プロメテウス三部作』などについて解説。講義の中では、演劇とは、古代ギリシャ以来、いまここにいない他者を、劇言語や俳優を通じて、いま・ここに召喚してきた。その意味では、演劇というメディア自体が、そもそも「ヴァーチャル・リアリティ」としての本質を常にもってきたのではないか、といった興味深い問題提起も投げかけられています。

参加学生の声

メディア芸術 3年
篠崎文さん

身体表現作品とVRの融合に挑戦してみたい

普段は、主に映像とインスタレーションについて学んでおり、詩とコンテンポラリーダンスを融合したパフォーマンス作品を制作しています。作品のキーになるのは、「身体表現」です。今回、VR演劇の特別講義に参加して、印象に残ったのは作品の「見せ方」です。VRゴーグルを装着すれば、観客は劇場のどの位置にいても最前列の没入感を味わえます。これは観客を作品に巻き込んでいく手法として魅力的だと感じました。作品の制作においても見せ方を意識し、身体表現の臨場感を残しながら、VRを融合させる方法を模索してみたいです。

特別講義 3 芸術理論を深化させる

文学、音楽、美術、建築、デザイン、身体表現など幅広い芸術表現の交点になるのが芸術学科。さまざまな刺激を自分の言葉に置き換える力は、学科を超えて創作力の視点を増やすチャンス。

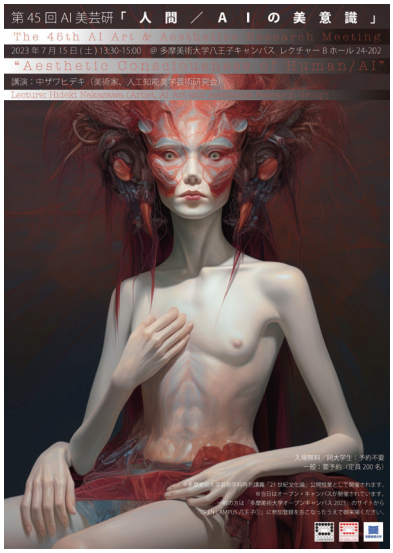
芸術が生まれる現場を言語化する

芸術学科特別講義「21世紀文化論」

芸術学科長
安藤礼二先生

初代芸術学科長で、美術評論家の東野芳明先生が担当していた「20世紀文化論」という講義を2000年代に蘇らせたのが、「21世紀文化論」です。講義では、文学、音楽、美術、芸術、建築、身体表現、AIアートなど多彩なジャンルの第一線で活躍する表現者の方々を招いて、芸術が生まれる現場での体験を語っていただきます。ゲスト講師は、専任教員が「今一番話を聞きたい人」を選ぶようにしています。これまで小説家の村田沙耶香さんや川上未映子さん、美術家の横尾忠則さんを招いたこともあります。

目的は、芸術学科を幅広い芸術表現がクロスする交点と位置づけ、学生たちに広く芸術を捉える視座を提供することです。一般の人たちに「芸術とは何か」を伝えるためには、さまざまな芸術の経験を積む必要があります。表現者たちが語る生身の現場の声は、この経験に値するものです。学生たちは、講義で受けたさまざまな刺激を自分なりの「言葉」にしていきます。新しい芸術を伝える言葉を鍛え上げること。それが21世紀の表現者になることだと考えています。そのため、講義自体も時代に合わせて刷新を続けています。



講義 1 ｜ 2023年7月15日

アートツールとしてのAIの現状と可能性

中ザワヒデキ「第45回 AI美芸研「人間／AIの美意識」」

美術家の中ザワヒデキさんが、草刈ミカさんと主宰している「人工知能美学芸術研究会」（AI美芸研）の第45回として、公開授業となった本講義。テーマは、「人間／AIの美意識」で、表現技術そのものが意識を持って自立した場合について考えました。講義前半では、AIブーム上の歴史的な事象を紹介しながら、現代のツールとして注目を集める「大規模生成AI」の話題や、将来、美意識や自意識を持つ、人ならざる“他者”としてのAIが登場する可能性について、お話しいただきました。また後半では、中ザワさん、草刈さん、芸術学科・小川敦生教授が登壇し、会場からの質問も取り込んだ、全体討論が行われました。

講義 2 ｜ 2024年6月29日

クリスティーズの事例からアート市場を知る

山口桂「オークションの世界とその舞台裏」

株式会社クリスティーズジャパン代表取締役社長である山口桂さんの講義では、オークションハウスであるクリスティーズの事業内容をはじめ、出品作品にまつわるエピソードや、オークションの利用方法、また、日本のアート市場活性化に向けたインバウンド誘致や税制の見直し、美術教育などの必要性についてお話しいただきました。アートを研究／制作している多摩美生にとっては、アートとビジネスの両方を併せ持つオークションの世界について理解を深めるとともに、アートとの関わり方やこれからの市場の行方を考えるための、重要な講義となりました。

講義 3 ｜ 2024年9月28日

ノーベル文学賞作家の作品から「文学」を考える

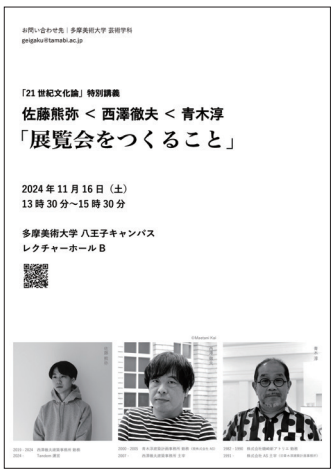
菊間晴子「文学とは何か 大江健三郎をめぐって」

戦後を代表する作家・大江健三郎から「文学」「言語」「作品」を考える講義。文学研究者の菊間晴子さんには、複数の作品で同じテーマを取り上げるなど“書き直しの作家”である大江の「主題の書き直し」と「表現の書き直し」、そして大江が書き直し続けた主題のひとつである「魂の救済」について、お話しいただきました。

講義 4 ｜ 2024年11月16日

建築家の視点で語る「展覧会」

佐藤熊弥＜西澤徹夫＜青木淳「展覧会をつくること」



3名の建築家による講義は、展覧会の会場構成や設計に携わる建築家でありながら、それぞれ着目するポイントや実践内容に違いがあるという佐藤さんの見解から始まり、各々がどう展覧会と関わり、個性や違いがどこで現れるのかに注目して、広がっていきました。

講義 5 ｜ 2021年10月16日

質疑応答を軸とした学生との交流　森村泰昌「M式・美術応答セヨ!」

講師である美術家の森村泰昌さんからの、「学生たちは日々、何を考え、何に興味を持っているのか？」という問いかけと、「何かに対して疑問を持つことは、その人の人生の指標となる」とのご提案から、講義は質疑応答を軸とした構成になりました。

学生からは、森村さんの作品制作のきっかけやプロセス、セルフポートレイト作品における“作家の自我”と“テーマとする人物”の境目について、また、絵画と比較した写真や映像表現の位置付けといった疑問が寄せられました。

M式「海の幸」第9番：たそがれに還る／ 2021年 カラー写真、透明メディウム

芸術学科特別講義 ｜ 2024年11月14日

装丁をその場で行うことで装丁の可能性を探る

川名潤と水戸部功がその場で「装丁する」90分

装丁家の川名潤さんと水戸部功さんによる実演と、トークセッションを交えた特別講義。実演では、おふたりの即興デザインをライブビューイングし、トークセッションでは、制作された装丁について両名が検討し合いました。作り手の意図を言葉として捉えながら、同時にその考えがデザインとして立ち上がっていく、学生にとって貴重な体験となりました。

参加学生の声

グラフィックデザイン
3年
小林夏希さん

プロのデザイン作業を間近で見る貴重な経験

イラストやタイポグラフィを組み合わせた平面作品を制作している私にとって、この講義は貴重な機会でした。序盤から文字のフォントを細かく調整する水戸部さん、先に写真や文字を大胆に配置する川名さんと、おふたりのアプローチの違いを知ることができました。“余白”を残すことでデザインの過程が見えるようにしているお話など、すぐに自分の制作に活かしたいと思える学びが溢れていました。

2019年度Pacific Rim「Undercover Street Culture LA×TOKYO:Eat・Shop・Play」はアメリカで行われた

国際協力授業 視野を海外へ広げる

ボーダレスの時代に世界で通用する力を磨くことが重要とわかっているなら、チャンスを見逃す手はありません。海外に飛び出す前に挑戦してみませんか。

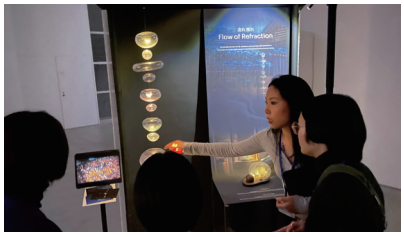
デザインが社会に果たす役割を探求

アメリカのアートスクールと協働する「パシフィックリム」

Pacific Rimは、アメリカの協定校であるアートセンター・カレッジ・オブ・デザインと2006年から実施している国際協働教育プロジェクトです。両校のデザイン分野で学ぶ学生たちが、高齢化問題から日本の伝統工芸まで、グローバルかつローカルなテーマを取り上げ、デザインが果たすべき役割について探究し、革新的な解決案を提示していきます。

17回目となるプロジェクトでは、「Healing Light - 癒しの光」をテーマに、日本における光と影に対する深い理解と最先端技術、生体リズムを意識したデザイン、空間に自然の要素を取り入れるデザインなど、癒しの要素を含むデザインについて研究を行いました。

本プログラムの実施期間は3カ月にわたり、フィールドトリップでは、日本各地の企業やギャラリー、美術館などを訪問。学生たちは、伝統的な工芸品やインスタレーション、住宅用のライティングや工場の照明などの見学からインスピレーションを受け、LED・アクリル・粉体塗装等のワークショップにより素材の知識や技術を学びました。



2024年度「Healing Light - 癒しの光」最終発表会でのプレゼン（上）と作品紹介（下）の様子

参加学生の声

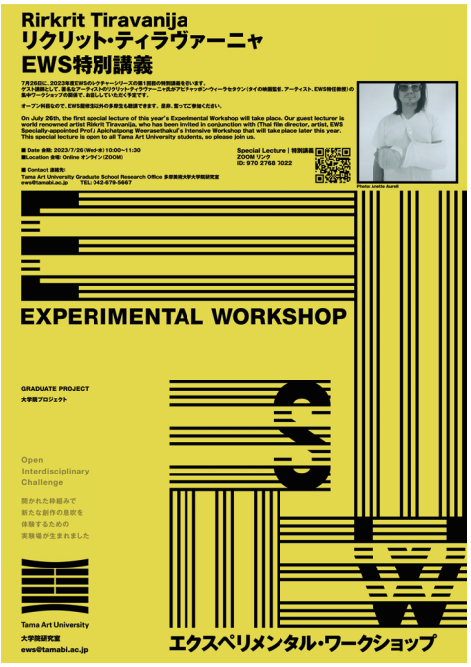
共同制作を通じて文化や価値観の違いを感じたことが刺激に

見た人をワクワクさせたいという思いのもと、さまざまなメディア表現に取り組んでいます。パシフィックリムへの参加を決めたのは、国際交流への強い興味があったからでした。昨年度は英語力に自信がなかったことから断念したのですが、今回は勇気を出して一歩踏み出すことにしました。

フィールドトリップを通じて日本の伝統工芸における「重なり」や「透け感」の美しさに感銘を受けた私たちは、「PlaRain®」という新しい素材を使用し、光の透過性や層の重なりを活かした空間の制作に挑戦。ペアを組んだアメリカの学生とは表現の方向性が近く、制作はスムーズに進行しました。ただ、文化や言語の違いもあり、時には気持ちのすれ違いが生じる場面も。しかし、お互いが文字や身振り手振りを活用しながら考えを共有し、ふたりで作品を完成させることができました。

ペアの学生との交流は、人生に対する考え方も豊かにしてくれました。彼女は社会人を経て、現在はアートセンターで学んでいます。その自由な生き方に触れ、自分の将来の選択肢が広がったと感じています。

メディア芸術 3年
大崎栞さん



| 大学院特別講義 | 2023年7月26日

世界各国でパフォーマンスを行うアーティストの歩み

リクリット・ティラヴァーニャ EWS特別講義 大学院特別講義

大学院生対象の横断型プログラム「エクスペリメンタル・ワークショップ（EWS）」のひとつとして、アーティストのリクリット・ティラヴァーニャさんによる特別講義を実施。第一部では、偶然アーティストの道に進むことになったというリクリットさんのバックグラウンドが語られました。第二部では、代表作「パッタイ」をはじめとする作品が紹介。第三部では、学生たちと質疑応答を交わしました。講義パートは学部生にも開かれ、多くの学生がリクリットさんの言葉を通じて「アーティストであること」について考えを巡らせていました。

参加学生の声　「生活自体もアート」という気づきを得た貴重な講義

タイからカナダに渡り、その後も海外でアーティスト活動を続けてきたリクリットさんのヒストリーは、作家を目指して中国から日本にやってきた自分にとって多くの学びがありました。

私は、多摩美の油画専攻で4年間を過ごし、そのうち半年間は交換留学先のドイツで学びました。そんな私には、「西洋の基準に合わせずに、自分の文化や価値観をもとに作品を作ればいい」というリクリットさんの言葉が強く響きました。リクリットさんは、美術館でタイ料理の「パッタイ」を振る舞う作品で注目を集めました。この作品が紹介されたことで、私は言葉を超えて、「自分の生活」を伝えることの可能性を感じました。

また、「何もしない時期も作家にとって大事である」という言葉にも勇気づけられました。これは卒業後の未来を模索していた私にとって、「悩むこともあるけど大丈夫」というアドバイスに聞こえました。講義全体を通して、日本における「生活自体もアート」という気づきを得ました。今後も日本を拠点に自分のペースで創作活動を続けていくつもりです。

24年油画卒業
Yang Xuechun（ヤン シェジュン）さん

| 建築・環境デザイン特別講義 | 2023年10月3日

ベルリン芸術大学教授によるデザイン講義

ガビ・シリッグ「future(s) of space（空間の未来）」

協定校であるベルリン芸術大学からガビ・シリッグ教授を招へいした特別講義。アーティストであるシリッグ教授のこれまでの主な作品と、その作品に込めた意図や目的、「あらゆるものをつなぐ建築物を生み出すこと」という自身の作品における究極のゴールなどが説明されました。その後、ベルリン芸術大学の学生が取り組んでいる授業や課題、学生の作品についても多く紹介されました。参加学生はシリッグ教授の柔軟で独創的な作品解説や、ベルリン芸術大学の授業方針や学生の作品に触れ、国際的な視野を広げました。

| プログラム |

留学初心者向けのスタートアッププログラム

海外短期語学学習プログラム「多摩美TRY」

海外で学び、異なる文化に触れることで、知見を大きく広げることができますが、英語力の不安や経験のなさから、留学への一歩が踏み出せない学生もいます。

「海外短期語学学習プログラム」は、そのような留学初心者のためのスタートアッププログラムです。応募条件に英語の語学力の条件はなく、大学から10万円の奨学金も支給されます。2024年度は、オーストラリアのメルボルンにある語学学校「Insight English Academy」が派遣先となり、2週間語学留学を実施しました。

留学生との親睦を深める国際交流パーティーもひらかれている

PBL科目 社会課題に横断的に取り組む

「絵に描いた餅」にしないのが多摩美流。社会と地続きの授業も数多く行ってきました。
企画して終わりではなく実際に社会実装されることで、卒業前には社会で戦う力が身につきます。

社会の現場から実践的な学びを得る

学生たちが触発し合うプロジェクト型授業「PBL」
（Project Based Learning）

多摩美では、産業界や行政と連携する「産学官共同研究」を30年以上にわたって実施してきました。その試みは、所属学科や学年の枠を超えて、横断的研究や社会的課題に取り組む「PBL（Project Based Learning）」のベースにもなっています。

PBL科目は、所属学科や学年の枠を超えて集まった学生たちが触発し合うことで、幅広く柔軟な考え方や新たな創造を生み出す学びの場です。また、デザインやアートの領域に捉われない幅広い視野と教養を身に付け、人間形成をはかれる科目となっています。

八王子キャンパスのアートテークで行われた大東建託との産学共同研究成果発表展に展示された「VISION MyTAG」の1/2スケールのプロトタイプ

Project 1 | 2022年度実施

学生が考案した次世代賃貸住宅が商品化

「次世代の賃貸住宅のプロトタイプ」
大東建託との産学共同研究

大東建託株式会社と、次世代の賃貸ユーザーとなる学生が共同で次世代賃貸住宅を開発するプロジェクト。建築・環境デザイン、グラフィックデザイン、プロダクトデザイン、芸術学を専攻する学生35名が所属学科の枠を超えて4チームを編成し、制作した建築模型やリーフレット、PRムービーなどのビジュアルコミュニケーションツールを用いながら、約5カ月にわたり研究に取り組みました。

また4チームの提案の中から、各住戸の一部に外との視覚的なつながりを作る「my spot」を設けた、「見せてつながる賃貸住宅」というコンセプトが評価された「VISION MyTAG」の商品化が決定。SNS的価値観を反映させて地域・入居者同士のリアルなコミュニケーションの醸成を図るという学生のアイデアをもとに、同社でのブラッシュアップを経た商品が販売されました。

成果発表展で展示された「VISION MyTAG」の1/2スケールのプロトタイプは、同社の賃貸住宅未来展示場「ROOFLAG（ルーフラッグ）」でも展示されました。

2024年2月16日には千葉県に1棟目が誕生。すでに9棟が販売されています

Project 2 | 2024年度実施

企画の立ち上げからすべて学生が主体となって実施

「タマリバーズ」二子玉川ライズとの地域連携アートプロジェクト

二子玉川ライズと多摩美術大学による地域連携アートプロジェクト「タマリバーズ」は、上野毛キャンパス近隣に二子玉川ライズが開業した2011年から毎年開催されており（※2020年を除く）、2024年には14回目を開催。統合デザイン学科と演劇舞踊デザイン学科が協力して運営しています。企画の立ち上げからコンセプト設計、脚本、演出、衣裳、美術、さらにWEBコンテンツやポスターなどのメディア展開まで、学生が主体となって実施しました。広場演劇『ミテル？』では、「目の前にあるわかりやすいキラキラしたものだけでなく、そこで失われたもの・忘れられたものにも目を向けよう」というメッセージを発信。大人から子どもまで大勢の方に観劇いただき、歌やマジックなどの見せ場では拍手が沸き、ダンスパーティーでは会場が一体となって踊るなど、大きな盛り上がりを見せました。

Project 3 | 2023年度実施

製品のプロトタイプやアイデアを発表

「0～3歳児の衣食住にちなむデザイン提案」ベビー用品を手掛けるフィセルと共創

ベビー用品ブランド「10mois（ディモワ）」の商品企画開発を手掛ける有限会社フィセルと共創し、多様性あふれる社会における、次世代の子育てに新たな価値を提案することを目指して、学科や学年を越えた約50名の学生が混成チームで取り組んだプロジェクト。

成果発表会では、親子で楽しめるラグマットや、“誕生した日、瞬間”をより特別な記念日にするアプリやプロダクトのセット、妊娠中のママとパパの気持ちをより近づけ、マタニティ期間のコミュニケーションをサポートするアプリ、世代を越え、社会全体で子育てへの意識や理解を高めるカフェなど、製品プロトタイプやリーフレット、アイデアコンセプトを紹介するPRムービーなどを用いながら、約8カ月にわたった研究の成果を発表しました。

今回提案されたアイデアやデザインは、今後同社からのリリースの可能性について検討されます。

Project 4 | 2014年度実施

産学共同で生まれたコーヒーマシンが発売

「ネスカフェ ゴールドブレンド バリスタ TAMA」ネスレとの産学共同研究

ネスレ日本株式会社とプロダクトデザイン専攻、情報デザイン学科とで取り組んだ「コーヒー・エクスペリエンス」の産学共同研究の提案の1つが「ネスカフェ ゴールドブレンド バリスタ TAMA」として発売されました。コーヒー豆の形を製品イメージとして採り入れた丸みのある形に、タッチパネル式操作ボタンがコンパクトに納められています。発売初年の2015年には50万台販売されました。また、バリスタ TAMAをテーマに学内で撮影された映像作品は、その美しさで大きな話題を呼びました。

2024年度 PBL実施科目

日本画
「和紙、漉きの研究講座」

グラフィックデザイン
「写真基礎実習［フォトグラム］／パッケージデザイン基礎」

テキスタイルデザイン
「布づくり演習／未利用繊維資源の紙づくり演習／
糸と紐・構造と表現／
五感を刺激するワークショップ実践」

建築・環境デザイン
「0～3歳児のための衣食住にちなむデザイン提案／
共有領域としてのアートの展開（淡路島）」

情報デザイン
「コミュニティアート2023／UI・UXデザイン基礎／
自然農と食のフィールドワーク」

統合デザイン
「空間や環境を構成する建装材に関する
デザイン戦略の構築と企画・デザイン開発／
デザインマネジメント実践／
タマリバーズvol.12（広報デザイン）」

演劇舞踊デザイン
「タマリバーズvol.12（プロデュース／クリエイション）」

大学院・附属施設 多摩美を使い倒す

大学院、研究所、素材研究室からデザイン・アートと社会をつなぐ場まで、講義やプログラムが用意されています。せっかく多摩美に入学したのだから、興味の赴くままに利用しましょう。

人類史の時空から芸術をとらえなおす

アートとデザインの人類学研究所 IAAD（Institute for Anthropology of Art and Design）

IAADでは、「芸術」という営みを数万年におよぶ「人類史の時空から捉え直す」研究を行っています。従来、考古学や文化人類学などの研究に限定されてきた人類の創造活動を、初めて総合的芸術研究の中で正面から対象化し「芸術学×人類学＝アート・アンソロポロジー」として発進させたのが始まりです。シンポジウムや研究会などは学生や社会一般の方々にも公開しています。

| IAAD | 2024年11月15日

現代的なアニミズムとは

「明日のアニミズム Animism Tomorrow」

デザイン：中村陽道

森羅万象に霊魂が宿っていると考えるアニミズム。映像作家・山城知佳子さんをゲストに、研究所の所員メンバーとともに現代的なテーマとして「アニミズム」を語ったシンポジウム。

| IAAD | 2024年7月17日

彫刻と考古学を考える

久保寛子
「わたしと彫刻と考古学」

先史芸術や宗教芸術などの造形性や歴史的背景・神話とのつながりのなかで彫刻的な実践を探求している久保寛子さんによる公開研究会。農耕や偶像などをテーマにした彫刻などの作品や、その制作における彫刻と考古学との関連についてお話しいただきました。

| IAAD | 2024年12月13日

災害と芸術表現

長崎剛志「神社とアートと庭と人」

庭園美術を通じて文化的価値と自然への敬意を体現する数多くのプロジェクトを手がけてきた庭園美術家・長崎剛志さんを講師に迎えた公開研究会です。神仏習合の庭「諫早神社の御神苑」を中心に、自然の力と信仰、災害と芸術の関係について考える機会になりました。

会期中に行われた公開シンポジウム「芸術とイメージの根源へ――サハラに眠る美を追いかけて」の様子

| IAAD | 2024年9月20日－10月5日

芸術人類学的に貴重な記録

英隆行写真展「悠久のロックアート――サハラ砂漠先史岩壁画」

写真家・英隆行さん撮影による、サハラ砂漠に残る先史岩壁画の写真展。超高精細かつ実物大の写真からは、当時の生活や信仰の痕跡が鮮明に感じられました。

参加学生の声

メディア芸術 3年
本桜子さん

人類学の資料に触れ発想の視野を広げたい

私は「悠久のロックアート」の設営に参加しました。巨大な写真プリントを天井から吊す作業は大変でしたが、実際の壁画のスケール感がより伝わるようになったのが印象的でした。壁画の線から書いた人の気持ちが透けて見えるような気がして、楽しかったです。また、写真プリントで見せる手法を学べたことで、自分の作品展示の選択肢も広がったと思います。また、資料の宝庫としてのIAADの存在も再確認しました。「コミュニケーションの可視化」をテーマに映像と写真による作品を制作しているので、発想の視野を広げるためにもIAADに通い、いろいろな人類学の資料に触れたいと思います。

大学院生対象の横断型プログラム

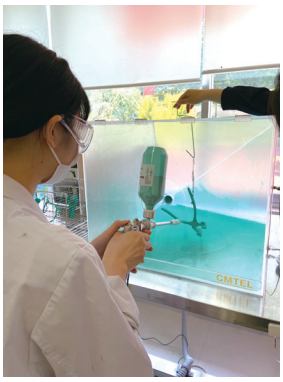
エクスペリメンタル・ワークショップ EWS

伊東豊雄 EWS特別講義 2023年9月14日

本学を象徴する建物である八王子図書館を設計した建築家であり、本学教授の伊東豊雄先生による集中ワークショップを実施。全3部のうちの第1部は、伊東先生のEWSのテーマである「心の中の風景を描く」の導入として行われた講義で、伊東先生の幼少時代の環境・体験が建築に与えた影響について、実際の作品紹介を踏まえてお話しされました。レクチャー会場となった八王子図書館についても、伊東先生の原風景の思い出や写真とともに紹介され、参加学生は建物を興味深く見渡しながら、建築に自然を取り込んでいく方法・表現についての理解を深めました。

最後はフロアディスカッションが行われ、多種多様なバックグラウンドを持つEWS参加学生が、自分の原風景を紹介したり、課題についての抱負を述べ合ったりしました。

箔プリンター


粉体塗装

触れる、使う、作るを体験

素材や技術の研究室 CMTEL

素材のワークショップ 随時開催中

Color（色彩）、Material（材料）、Trend（傾向）をExperiment（実験）して、Exploration（調査）することによって、学生自身が制作物の材料や考え方、アイデアの糸口を見つけるためのLaboratory（研究室）が、CMTELです。

銀粘土のジュエリー制作、粉体塗装、ガラス加工、箔プリンター、版画体験などのワークショップや、トレンドセミナー、新素材の説明会など、表現の手法を広げる講座が随時開かれています。

銀粘土

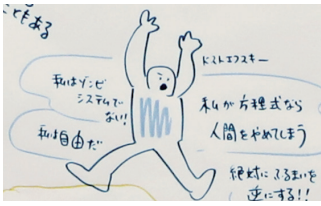
デザイン・アートと社会をつなぐ場

Tama Art University Bureau TUB

AIとデザインについて考える 2024年度実施

開催内容はこちら

TUBは、“まじわる・うみだす・ひらく”をコンセプトに、デザインとアートの持つ創造性と美意識を社会とつなぐ場を提供しています。バーチャル大学「Tama Design University」の「AIとデザイン」をテーマにしたミーティングでは、哲学者の下西風澄さんによるレクチャーと、参加者全員でのディスカッションを実施。意識や精神は歴史や文化、思想などにも根ざした複雑なものであるという考えなど、下西さんのAIと意識、デザインに関する深い哲学的・文学的な洞察に触れることができました。



参加学生の声

CMTELは多様な素材に触れアイデアを膨らませる場所

学部4年次にCMTELの銀粘土ワークショップに参加しました。銀粘土を製造している企業の方の指導のもと、オリジナルリングを作るというプログラムです。私は鳥獣戯画をモチーフにしたリングを作りました。絵画学科で版画を専攻していた私にとって、銀粘土でリングを作る体験は、紙以外の素材を知る貴重な機会になったと思います。

CMTELには、金属、樹脂、布などさまざまな素材が展示されており、直接触れることができます。また、刺繍ミシンやカッティングマシンなどを試すこともできます。私もこのワークショップでCMTELを知り、その後、自分の作品のアイデアを試すために利用しました。アクリル板を使った素材の活用について職員の方に相談したところ、親身になってアドバイスしてもらったのをよく覚えています。

CMTELでは、さまざまな素材や技術に触れられるワークショップを頻繁に開催しています。大学にいるうちにぜひ参加してみてほしいですね。

24年版画卒業
津崎真太郎さん

企業の人事担当者・卒業生に聞く

多摩美への期待と実績

NEC・ソニー・積水ハウス・パナソニック
企業のデザイントップの卒業生に聞く

2024年11月8日に、八王子キャンパスのレクチャーホールで、多摩美術大学を卒業後、日本を代表する企業でトップクリエイターとして活躍する先輩4名によるトークセッションが行われました。参加したのは、日本電気株式会社（NEC）の勝沼潤さん、ソニーグループ株式会社 の石井大輔さん、積水ハウス株式会社の矢野直子さん、パナソニック株式会社の木村博光さん。「デザイントップ対談 私たちの 過去・現在・未来」というテーマで行われた座談会の様子をレポートします。

➡ 4人のプロフィールはこちらから

過去　日々の課題から卒業制作まで、どんな多摩美生活を送っていたかを振り返る

➡学生時代の4人のお話の詳細はこちらから

【過去】のパートでは、プロダクトデザイン専攻の名物授業や卒業制作のエピソードを4人が披露。現在の仕事につながる学びもあったようです。

勝沼：平野拓夫先生のカラーリングの課題が記憶に残っていますね。色を分解してレイアウトするのですが、提出すると「OKリピート」と言われる。それで何回もやり直して、ようやくOKって言われたとき、「ああ、助かった」と。プロダクトデザイン専攻の名物課題でしたね。

石井：私は3年次の課題が比較的高く評価されたこともあって、4年次は卒業制作のチームリーダーを先生から任されました。メンバーのデザインを一緒に考えたり、統合的なコンセプトを創ったり、スケジュール管理もする。最後は、自分の制作が圧迫されちゃって提出もクオリティもギリギリでした……。でも、そこでチームマネジメントの重要性を学びました。今も自分がリーダーになるチームプロジェクトには常に危機感をもって細心の注意を払って進めています。

矢野：私はとにかく4年間、ハンズマン（東急ハンズの技術者）にお世話になりましたね（笑）。課題制

作は、自分では極力作らない。でも、ぐうたらなわりには、プレゼンをすごく大事にしていたんです。とにかく自分の作品をどうやって美しく撮るか、どうやってプレゼンを美しく演出するかを重要視していました。

木村：私は卒業制作で、組み立て遊具みたいなものをつくりました。メーカーにいろいろ聞きに行ったり、幼稚園に通って立体を作って、実際に子ども遊ばせて検証したりしていました。卒業制作のときに担当の先生によく噛みついていたのを覚えています。今の会社で多摩美卒の後輩社員に噛みつかれるとその当時を思い出します（笑）。

現在　今に至るまで、どんなキャリアをどのようにして積み上げてきたのか

➡現在の4人の活躍の詳細はこちらから

【現在】のパートでは、4人が活躍する企業での仕事内容を紹介。プロダクトデザインを学んだ先のリアルな仕事現場の様子が見えてきました。

勝沼：現在は、NECのコーポレートデザイン部のチームを統括しています。私は多摩美時代からずっとプロダクトデザインが好きで、続けてきました。今は、プロダクトデザイナーが、その周辺にあるサービス、ソリューションといったお客様の体験をどう設計するかというところに、時代は大きくシフトしています。私自身も世の中の潮流に合わせて、自分のキャリアや考え方を、どんどんアップデートしています。

司会進行はプロダクトデザイン安次富隆教授（写真左）

石井：それはソニーグループも同様です。デザイナーは、プロダクトだけじゃなくて、エンターテインメントの未来への提案からオフィスの空間デザインまで、幅広いジャンルを任されます。私が統括するクリエイティブセンターでは、プロダクトだけでなく、さまざまなブランディング、UIUX、サービスデザインを担当しています。実際、プロ向けシネマカメラのソフトウェアのデザイナーが、金融領域のアプリのサービスデザインをやっていたりもします。

木村：パナソニックは、家電製品がよく知られていますが、建材や家、街全体のソリューションも手がけています。ブランドの領域でもデザイナーが活躍しています。'21年にデザイナー出身の役員が生まれ、デザインが経営にも深く入り込んでいます。私は、デザイン経営、デザイン思考で考えた戦略の結果として、見えるモノをアウトプットしたいと考え、家電製品を中心としたパナソニック全体の世界観を作ってきた感覚です。

矢野：積水ハウスには一級建築士が約3000人いて、今まで何万棟もの家を建てています。その現場で何が必要かを考えると、デザイナーの私がここにいる理由がわかります。家を建てることは、街並みを作ること。この領域で社会にどう貢献ができるかを特にリーディングカンパニーは考える必要があります。お客様の心地よさ、美しい街並みといった抽象的な感覚を言語化し、エビデンス化する作業がデザイナーに求められているのを感じます。

未来　今後どのようなデザイナーが求められていくのか、そのためには何を学べばいいのか

➡4人が考えるこれからのデザイナー像はこちらから

生成AIが登場し、世の中の変化は加速しています。【未来】のパートでは、卒業生4人がデザイナーの未来について話し合いました。

勝沼：最近、デザイン領域の境界が曖昧になっています。結局、対象物がプロダクトであれコミュニケーションであれ、物事の本質を引き出して、そこから伝えたいメッセージを研ぎ澄ませて、最終的に美しくわかりやすく表現する。それがデザイナーの仕事です。その上で、プロダクトやCGといった自分の「軸」を持ちながら、カテゴリーの境界を横展開できるデザイナーが、今後は求められると思います。

石井：軸があるのは大切なことだと思います。その上で、デザイナーに求められているのは、ストーリーを作っていく力とか、ふわっとしたものをビジュアライズする力だと思うんです。この数年、10年後のソニーのありたい姿を描くというプロジェクトに取り組んでいるのですが、10年後のビジョンをリサーチし、それをビジュアル化して伝わるものにするというのは、まさに美大卒のデザイナーに求められる能力だと思います。

矢野：これからのデザイナーには、AIという相棒が必須になるでしょう。デザインをするときの起承転結でいえば、相棒であるAIは「承」「転」をやってくれます。ただ、絶対にできないのは「起」と「結」だと思っています。つまり、発想と出力の部分でAIをどう使うかのセンスが問われます。AIという強い相棒がいるこの時代、アートや建築を見たり、美術史を学んだりして、美意識やセンスを磨くことがデザイナーとして強みになると思います。

木村：今、パナソニックでは単にプロダクトデザイナーを採用するだけじゃなくて、UI・UXデザイナー、デザインエンジニアなどいろいろな強みを持つ人を幅広く採用しています。そのため、多様なスペシャリストが集まるチームで、コラボレーションしていく力がますます大事になるでしょう。あと、矢野さんも言ったようにAI時代には、美意識が重要になります。アートだけでなく、経営で生かされる美意識などもあるでしょう。これはAIには絶対担うことができない部分だと思います。

企業の人事担当者・卒業生に聞く

多摩美への期待と実績

三菱総合研究所・アクセンチュア・文京区役所で活躍する卒業生に聞く
デザイン力を社会で活かすキャリアデザイン

12月11日に八王子キャンパスにて、建築・環境デザイン学科の卒業生である株式会社三菱総合研究所の田丸文菜さん（19卒）、アクセンチュア株式会社の川島里沙さん（21卒）、文京区役所の渡邉沙未さん（22卒）の3名をお招きし、キャリアデザイン特別講義を開催。多摩美での学びが仕事につながった経験のほか、在校生たちがこれからのキャリアを考えるうえで重要となるポイントについて話していただきました。

三菱総合研究所　「美大卒業生の少ない場所にこそチャンスはある」

田丸文菜さん
株式会社三菱総合研究所
社会インフラ事業本部
都市イノベーショングループ

住宅や建築に関する研究を持続可能なまちづくりに活用

学生時代は建築やランドスケープ、インテリアに関する課題に取り組むほか、産学連携プロジェクトにも参加するなど忙しい日々を送っていました。その中で特に関心を持ったのは、環境デザインを通じて社会や地域の課題に貢献することでした。卒業制作では、地域の雨水や地下水を循環して活用できるような新しい集合住宅のかたちを提案。卒業後はマンチェスターにある建築系の大学院への留学を経験し、歴史ある建築物のリノベーションに関する実践的な研究を重ねました。

こうした経験を踏まえ自分のやりたいことを考えた結果、たどり着いた企業が三菱総合研究所でした。当社では、主に官公庁からの依頼を受け、医療やエネルギー、教育といった幅広い分野における社会課題の解決に携わっています。私はまちづくりの専門家として、公共施設の基本計画づくりなどに参加。建物を建てて終わりにするのではなく、将来にわたって持続可能な活用方法を探る仕事にやりがいを感じています。

最近、仕事でもアートやデザインに関する話題が増えており、美大生の就職のチャンスは広がっていると思います。学生時代に培った表現力はもちろん、作品作りの過程で問いを追求してきた経験が、企業・社会で課題解決をしていく上で大いに役に立ちます。企業が取り組む“課題点の見極め”は美大生の得意分野だと思うので、“なぜ”をとことん突き詰める力を磨いていってください。

アクセンチュア

「やりたいことを突き詰めたらサービスデザインだった」

川島里沙さん
アクセンチュア株式会社
ソング本部

生活者視点のリサーチをもとに新たな価値を届けるデザイン

外資系コンサルティング企業のアクセンチュアでサービスデザイナーを務めています。私はお客様である企業の課題や想いを起点にユーザーのリサーチを行い、「本当に求められていることは何か？」を導き出します。その上で、サービスのコンセプトを設計・提案し、実現まで携わることで新たな価値を創り出しています。会社のパーパスは、テクノロジーと人間の創意工夫で、まだ見ぬ未来を実現すること。お客様とともに、あるべき未来やサービスのあり方を描き追い求める活動は、やりがいや社会へのインパクトを感じられます。

この仕事を選んだ背景は、建築・環境デザイン学科での学びにあります。まず敷地を訪れ、そこに住む人々にヒアリングを行う。その後、「あるべき未来像」を構想、可視化、プレゼンして伝える……というプロセスでした。この一連の流れの体験は、現在の仕事に活かされています。

私はもともと、形のある空間デザインへの道を考えていました。しかし、多様な方々との対話を通じて「体験そのものをデザインする仕事」の存在を知り、「こんな仕事があるなんて！」と衝撃を受け進路を決めました。自分のやりたいことを人に話すことで、進みたい世界が拓けてきます。漠然としていた考えを言葉にすることで、本当に大切にしたいことに気づくこともあります。また、そこから新たな出会いや情報に次々とつながっていき、よりワクワクできる世界へと近づいていくはずです。進路に悩んでいる方は、ぜひ、まずは信頼できる人から、自分のやりたいことを話してみてください。

文京区役所

「伝える力はあらゆる場面で求められるはず」

渡邉沙未さん
文京区役所
施設管理部 保全技術課

地域連携活動をきっかけに公共施設の開発や補修を計画

多摩美在学中に地域と連携した活動の面白さを実感し、文京区役所で建築職として働くことを決めました。現在は、学校や公園など区が所有する公共施設の補修や耐震工事に携わっています。具体的な作業は工務店や設計事務所などに発注するので、自ら建築業務を手がける機会はありません。しかし、デザインや建築を学んできた立場から意見を出せる点が自分の強みになっていると感じています。

仕事をする中で大切にしているのは、施設を利用する人々のことを考えながら開発や補修の計画を進めることです。例えば学校の工事に関わる際、どうすれば子どもたちが自由に学んだり遊んだりできる空間を作ることができるのか。さまざまな関係者にヒアリングした内容を計画に落とし込んでいきます。その過程において、先生たちの教育に対する考えや子どもたちを大切に思う気持ちが伝わってきたときにやりがいを感じます。

美大を卒業して公務員になる人の数は決して多くありません。しかし、そんな環境でも自分なりに努力を続けている中で、上司から「渡邉さんは最後までやり抜く力がある」と言ってもらったことがありました。利用者にとって居心地のいい空間を実現するため、建築の色や素材まで細かくチェックする。そんな私のこだわりを評価してくれたのだと思います。建築デザインを学んできた経験が仕事に活きていると感じた瞬間でした。

美大生は作品のプレゼンで自分の気持ちを伝えることに慣れていると思いますが、就職活動や仕事においても「伝え方」は非常に重要です。相手のことを考えつつ、自分の伝えたいことを正確に言語化するための技術を身につけておいてほしいと思います。

司会進行を務めたのは、建築・環境デザイン学科の田嶋豊准教授

第13回

企業の人事担当者・卒業生に聞く

多摩美への期待と実績

メーカー

セイコーエプソン

プリンター、プロジェクター、パソコン、スキャナーといった情報関連機器や、精密機器などを手掛ける電機メーカー。

柔軟に情報や意見を吸収しながら強みであるデザイン視点でものづくりを推進してくれる存在

人事部

下田脩平さん

セイコーエプソンは、時計という非常に精密な機器の製造の中で、いかに無駄を省いて小型化し精度を高められるかという意思で技術を培ってきました。現在はこの「省・小・精」の技術をベースに、プリンターやプロジェクター、産業用ロボット、水晶・半導体の製品など幅広く事業を展開しています。

多摩美の卒業生には、自分の強みを生かしながらも、周りの意見や市場動向などを把握、吸収して、デザインの視点で柔軟に業務に取り組んでいる社員が多い印象です。事業領域の広い我々の会社では、ひとつの製品だけに携わり続けることはあまりありません。柔軟にアンテナを張って、デザインの幅を広げながら、それぞれの方が志向や個性を生かしたキャリアを積んでいってほしいと思っています。

Pデザイン部

神長 聡さん

（16年プロダクトデザイン卒）

入社以来、さまざまなジャンルのプリンターのデザインに携わり、現在は産業系大判プリンターを担当しています。ひとことにプリンターと言っても多くのジャンルがあり、お客様も用途も全く違います。機能性や耐久性、安全性など、複雑な条件を一つひとつ整理し、使いやすさとデザイン性を両立した製品を作っていくことにやりがいを感じています。最近、発売された大判プリンターのデザインには、入社４年目から携わりました。当初は産業用プリンターを使ったこともありませんでしたが、製品やお客様のことを理解しないと良いデザインはできないと考え、１年間ほど、かなり勉強して、いろいろな産業用プリンターを自分でも扱えるようになりました。そういう努力を続けてデザインを創りあげたこの製品には、とても思い入れがあります。

飲食店でのシーリングに使われるラベルプリンターを担当した際には、粘着性の強いラベルが外装に貼りつかないように、シリコン加工されたシート材を採用して、デザイン性と機能性を兼ね備えた製品を実現しました。このアイデアは最終的に特許化につながり、また、製品は国内外のデザイン賞を受賞するなど、世の中に認めていただく、とてもうれしい経験になりました。

多摩美では、課題やグループワークの中で今の社会人生活にも活きる貴重な経験をしました。時には人と意見が対立することもありましたが、それぞれが思い描くゴールに向けて共に切磋琢磨した日々は、設計や営業などさまざまな分野の方々と一緒に働く現在の環境と少し似ている部分もあると思います。デザインやアートについて真剣に語り合える仲間を得て、濃厚な時間を過ごした学生時代は、僕の人生にとってかけがえのないものです。

WP事業戦略推進部

菊地美紗妃さん

（20年プロダクトデザイン卒）

現在は、ORIENT STARとORIENTというブランドの腕時計デザインを担当しています。基本的に腕時計のデザインは、推進担当がひとりでデザインを考え、進めていくことが多いです。わくわくする反面、大変なこともありますが、先輩方に相談しながら、実践で学んでいます。弊社は「マニュファクチュール」、つまり自社で一貫して腕時計を生産する考えのもと、腕時計のムーブメント機構からケースや文字板、バンドなど腕時計に関わるすべてのデザインに携わります。商品提案から始める、0から1を生み出すことが求められ責任は重大ですが、その分大きなやりがいを感じます。ORIENT STARの商品では60周年記念モデルのダイバーウォッチのデザインを担当しました。ダイバーとしての機能性を考慮しつつ、限定モデルならではの特別感が伝わるように意識しました。腕時計は特にデザインが重要といわれる商品。発売後に販売営業からは好評だと聞き、いくつか時計雑誌にも掲載されたことは良い経験になりました。また、Moving Blueシリーズのモデルでは国内外で人気があり、実際に店頭や海外の展示会でお客様に褒めていただくこともありました。こうした反応を直接感じることができるのも、仕事の大きなやりがいの一つです。

学生時代、私は講義や教授からのコメントをよくメモに残していました。先日、実家でそのメモ帳を改めて見返してみると、当時は重要だと感じなかったことが、今になって非常に意義深く思えたりして、面白い気づきを得ることができました。業務で行き詰ったときには、当時のメモや教授がわかりやすくまとめてくれたプリントを再度確認することもあります。特に「概念をいったん忘れてみる」という教授からのアドバイスは、固定概念にとらわれがちな私に、新たな視点で考え直す姿勢を思い出させてくれました。

多摩美出身者は、ビジネスの最前線からどのような評価を受けているのでしょうか。また、その卒業生たちが学んだ多摩美での4年間は、ビジネスの現場でどう生かされているのでしょうか。さまざまな業界で活躍する企業人たちに尋ねました。

本記事は連載企画です。さらに詳しい内容や他企業情報はWebでご覧になれます。

出版

宝島社

『リンネル』や『sweet』といった人気ファッション雑誌、ファッションや雑貨などの有名ブランドのグッズが付属したブランドムック®、書籍などの出版事業を展開。

アイデア力やマーケ視点に加え商品を世に出す粘り強さが新たなヒットを生み出している

執行役員コンテンツ&プロダクツ局局長
藤定修一さん

弊社は情報産業であり、情報を取り扱うことでコンテンツを創造し、市場に商品を流通させていくことが事業の主軸。長くファッション誌などを発行する中で、ファッションや雑貨など有名ブランドの付録付きブランドムック®へと販売する商品が多様化しました。在籍する多摩美の卒業生は情報感度が高く、「人を楽しませたい、物を作りたい」といったエネルギーに満ち、自分の作りたい視点に加えて、マーケティング視点、つまり、消費者がどう考えるかを含めた洞察に長けていると実感します。ものづくりの過程で「もう撤退したほうがいいのでは？」と思った企画でも、「まだあきらめません」「実現する道はあります」と、商品化まで完結させる粘り強さもあります。その踏ん張りがあるから、今まで世の中になかったヒット商品が生まれるのです。

コンテンツ&プロダクツ局
第1部部長第1編集部編集長
皆川祐実さん
（08年情報デザイン卒）

入社後、多くのものを作ってきた中で、印象深いのは大好きだったさくらももこさんの『コジコジ』のファンブックを作ったこと。反響もあり、同キャラクターのライセンス管理をする会社から、取扱を始めたmozの商品展開について相談を受け、付録付きのムック本を作ろうと話が進みました。それが今や累計600万部。好きがつないでくれた縁が一番のヒット作品になりました。

大学時代は作品をプレゼンする機会が毎週あり鍛えられました。その経験は今役立っています。宝島社は企画会議が毎週ありますが、学生のときからの延長線に感じられ、大変だと思ったことはありません。大学の学びで大きかったのは、情報を伝えるための手法を多く学べたこと。伝える武器をたくさん手にできたことは財産です。テレビCM製作のときも「どういう15秒間にするか」と自ら絵コンテを書き、CMプランナーとも積極的に関わることができました。ゼミの宮崎光弘先生から言われた「グッとくるものを作れ」は、いまもものづくりの根底にあります。刺激に満ち、鍛錬でき、自分を解放できた4年間があるから、自信を持って仕事に向き合え、発言もやることも遠慮せずに伝えられる。胸を張って言えます。

エンターテインメント

ポケモン

「ポケモンという存在を通して、現実世界と仮想世界の両方を豊かにすること」を掲げ、「ポケットモンスター」に関連した事業を行う。

深い思考と愛着を持ってデザインの可能性を広げ、未来を切り開く存在に

常務執行役員
管理本部 本部長／ポケモン×アート推進室 担当
田中雅美さん

弊社は、ポケモンをプロデュースする会社であり、世界中でポケモンが長く愛される存在であるために、さまざまな事業や活動を行っています。プロダクトやサービスの増加、展開地域の拡大、そしてメディアの多様化によって表現の幅が広がる中で、デザイナーの活躍の場も急速に拡大しています。

弊社に所属する多摩美の卒業生は、技術的な能力だけでなく深い思考をもとにデザインを構成する力が非常に高く、長く愛されるものを生み出す力を持っています。ポケモンの素晴らしい魅力を新しい世代に伝え続けていく原動力として、益々の活躍と成長に期待しています。

デザイナー
永山高輔さん
（21年グラフィックデザイン卒）

現在は、ゲームの世界観を伝えるためのマップアートをはじめとしたプロモーション素材の制作を担当しています。出来上がった素材はプロモーション映像やWebページなどで使用され、世界中のポケモンファンの目に触れることになります。大きなやりがいとともに、「それに値するものを作らなければ」というプレッシャーもありますが、絶対に妥協しないという決意を持って取り組んでいます。

多摩美ではデザインや制作に関して幅広く学ぶことができ、多彩な興味を持つ仲間との交流の中からもたくさんの知識や気づきを得ました。また、課題提出は厳しいレビューと指導をいただきながら、コンセプトワークの重要性を深く理解することにつながりました。こうした経験は、現在、多岐にわたるジャンルのデザインに携わる上で大きな助けになっています。

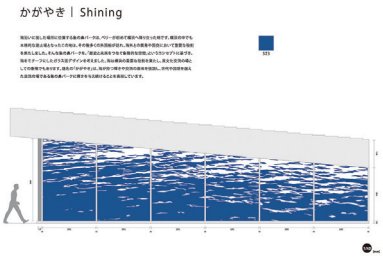
JAGDA国際学生ポスターアワード2024で統合デザイン3年の町田ちひろさんがグランプリ受賞

JAGDA国際学生ポスターアワード2024で、統合デザイン３年・町田ちひろさんの作品『Re.lation』がグランプリを受賞しました。町田さんは『for smiles』で協賛企業特別賞（モリサワ賞）にも選ばれています。そのほか、５名が入賞しました。
本アワードは日本最大のグラフィックデザイナー組織・公益社団法人日本グラフィックデザイン協会（JAGDA）主催による、国内外の優れた若い才能の発見と顕彰、およびグラフィックデザインの新たな発展と進化を目的に創設されたもので、国籍や年齢を問わず、高校生以上の学生を対象としています。今回は「Peace」をテーマに作品を募集。

町田ちひろ『Re.lation』

CSデザイン賞学生部門においてグラフィック3年生が金賞受賞

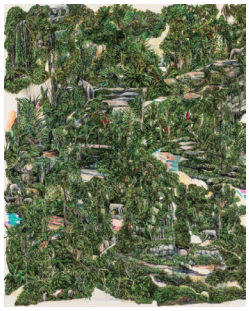
グラフィック3年・白石水遼さんが『かがやき』で、第23回CSデザイン賞 学生部門の金賞を受賞しました。また同4年の神田耕匠さんも入選しました。同賞は、株式会社中川ケミカル主催により2年に一度開催される「カッティングシート®」を使用した優れた作品を表彰し、広く紹介するデザインアワードです。今年度の学生部門は、「新しい“文化交流”の場を創造するデザイン」がテーマでした。



白石水遼『かがやき』

卒業生の渡辺愛子さんが雪梁舎フィレンツェ賞展にて受賞

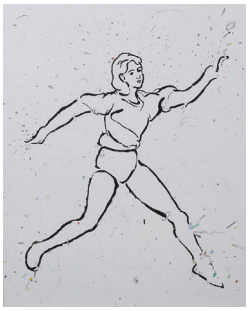
01年油画卒業・渡辺愛子さんの『終わりがない明日の景色を覗き見る』が、第26回雪梁舎フィレンツェ賞展にてフィレンツェ大賞を受賞しました。また、19年大学院日本画修了・前島愛由さんが佳作、日本画４年・伴芹海さん、羅浩鳴さん、23年大学院日本画修了博士・陳柏欣さんが入選しました。同賞は、雪梁舎美術館設立者であり、株式会社コメリ創業者でもある故・捧賢一氏が発案し、1999年から開始したものです。



渡辺愛子『終わりがない明日の景色を覗き見る』

Idemitsu Art Award 2024で卒業生が最高賞受賞

若手作家を対象とする公募制の美術賞「Idemitsu Art Award 2024」で、08年油画卒業・笹本明日香さんがグランプリを受賞しました。ほか、多数の本学関係者が入選しています。「Idemitsu Art Award」は、1956年に創設し若手作家の登竜門として知られてきた「シェル美術賞」が改称されたものです。今回、922点の作品応募からグランプリを含む7点の受賞作品と46点の入選作品が決定しました。12月には国立新美術館で受賞・入選作品が展示されました。



笹本明日香『アクセス』

卒業生の磯崎海友さんが第91回日本版画協会賞を受賞

東京都美術館にて第91回版画展が開催され、版画修了・磯崎海友さんが大賞にあたる第91回日本版画協会賞を受賞しました。磯崎さんは、日本版画協会賞のほか2つの賞を受賞しています。また、大学院版画１年・藤原聖也さんがA部門奨励賞を受賞、同じく大学院版画1年・キムスヨンさんがギャラリー賞ギャルリ・シェーヌを受賞しました。日本版画協会は、一般社団法人の版画家集団として、国内外の現代版画界へ大きな影響を与えつつ、幅広い芸術活動を繰り拡げ続けています。

磯崎海友『ポテト依存症』

TOKYO MIDTOWN AWARDで卒業生がグランプリ受賞

2024年10月10日、「TOKYO MIDTOWN AWARD 2024」の結果発表および表彰式が東京ミッドタウンで行われ、13年プロダクト卒業・福田雄介さんがデザインコンペ部門のグランプリに選ばれました。23年グラフィック卒業・栗本真亜人さん（Baumkuchen）はファイナリストに選出されました。また、アートコンペ部門ではファイナリストに選出されていた18年油画卒業・大原由さんが優秀賞を受賞しました。

福田雄介『トイ文具』

第59回神奈川県美術展で在学生が特選受賞

公募美術展「第59回神奈川県美術展」の入賞作品が発表され、工芸部門でテキスタイルデザイン3年・遠藤菜々子さんが特選を受賞。ほかにも、本学卒業生・学生ら5名が入賞しました。神奈川県美術展は、新進作家の育成と美術愛好家の創作活動の発表の場として、1965年から続く公募美術展です。平面立体・工芸・書・写真の4部門からなり、今回は1,272点の応募から4部門の大賞を含む40の入賞作品が決定しました。

遠藤菜々子『私から見た甲虫図鑑』

「VOCA展2025」にて修了生がVOCA奨励賞を受賞

テキスタイルデザイン修了・小林万里子さんの作品が、2025年3月15日～3月30日に上野の森美術館で開催された「VOCA展2025」のVOCA奨励賞を受賞しました。2025年の開催で32回目となる「VOCA（ヴォーカ）展」は、平面美術の領域で国際的にも通用するような将来性のある若い作家の支援を目的に1994年より毎年開催している美術展です。本展では、全国のアートの現場に精通した美術館学芸員、研究者などが将来性のある40歳以下の若い作家を推薦しています。

小林万里子『The Five Domains』

「FACE2025」で総勢9名の在学生・卒業生が受賞・入選

新進作家の動向を反映する「FACE2025」の受賞・入選者が発表され、大学院油画2年・HUANG YUQIさん、同じく大学院油画2年・竹内美樹さんが優秀賞を受賞するなど、総勢9名の学生・卒業生が受賞・入選を果たしました。SOMPO美術財団と読売新聞社が主催するこのコンテストは「年齢·所属を問わず、真に力がある作品」を公募するもので、受賞·入選作品は3月1日から23日のあいだ、SOMPO美術館で行われる「FACE展2025」で展示されます。

HUANG YUQI『物事の秩序Ⅱ』

竹内美樹『祖母宅の庭』

日本パッケージデザイン学生賞で統合デザイン3年生が受賞

「日本パッケージデザイン学生賞2024」で、統合デザイン3年・河野円香さんが、審査員特別賞（中村直継賞）を受賞。そのほか、6名が入選しました。同賞は公益社団法人日本パッケージデザイン協会（略称：JPDA）により、パッケージデザインの新しい魅力と価値を学生とともに発掘・伝播していくことを目的として設立された、新進の学生パッケージデザインアワードです。今回は「かわる」をテーマに作品が募集されました。

河野円香『RIPG』

グッドデザイン・ニューホープ賞で学生・卒業生が多数入選

「2024年度グッドデザイン・ニューホープ賞」で、学生と卒業生の9名が入選を果たしています。同賞は「グッドデザイン賞」を主催する公益財団法人日本デザイン振興会が、2022年に設立したデザインアワードです。新しい未来を拓き、これからの時代を担うデザイナーの発掘を目指し、《物のデザイン》《場のデザイン》《情報のデザイン》《仕組みのデザイン》の4つのカテゴリーで作品を募集したものです。

GOOD DESIGN NEW HOPE AWARD

グラフィックデザイン2年生がMakeup Art Pen Awardで受賞

花王株式会社と株式会社コーセーの化粧品事業での持続可能な社内の実現を目指した協働の取り組みに本学が協力し、「Makeup Art Pen Award2024」が開催されました。この取り組みはメイクアップ化粧品をアップサイクルした3色の水性ボールペンのみを用いたデザインコンテストで、今回のテーマは「彩りをひらく、未来」。最終審査に選ばれた10名によるプレゼンテーションを経て、グラフィックデザイン2年・関原優奈さんがグランプリを受賞しました。

関原優奈『バタフライエフェクト』

ネクタイデザインコンペで東京都知事賞を受賞

2025年1月12日、八王子織物工業組合主催「2024 Mulberry Cityネクタイデザインコンペ」にて、テキスタイルデザイン4年・三谷莉子さんの作品が 274の応募作品中入選20のうちのひとつに選ばれ、東京都知事賞を受賞しました。八王子織物工業組合のオリジナルブランド「Mulberry City」では、毎年ジャカード織ネクタイの新作を発表しています。当コンペはこのネクタイ柄のデザインを募集するもので、優秀作品は商品化されています。

三谷莉子受賞作品

全国学生絞り染織作品展にて学生が優秀賞、奨励賞を受賞

WSN JAPAN主催の「第3回 全国学生絞り染織作品展 Shibori NEW BEAT」において、大学院テキスタイルデザイン1年・李誠峻さんの作品『生命の源』が優秀賞を受賞しました。また、テキスタイルデザイン3年・小島由子さんの作品『自由と意力の繁栄』は奨励賞を受賞しました。

左：李誠峻『生命の源』、右：小島由子『自由と意力の繁栄』

深澤直人副学長がCollab Design Excellence Awards 2024を受賞

深澤直人副学長が、アメリカのフィラデルフィア美術館が主催する「Collab Design Excellence Awards 2024」を受賞しました。また、受賞を記念して、深澤副学長が手掛けてきた製品を振り返る大規模な展覧会「Naoto Fukasawa Things in Themselves」も同美術館にて開催されています。

フィラデルフィア美術館

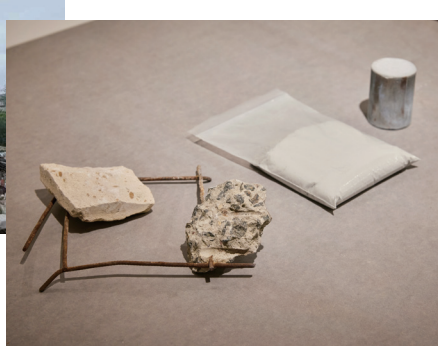
金井勇一郎教授が黄綬褒章を受章

令和６年秋の褒章における受章者が、2024年11月3日付けをもって発令されました。本学では、演劇舞踊デザイン・金井勇一郎教授が、歌舞伎美術家として文化財保護業務精励により「黄綬褒章」を受章しました。同褒章は昭和30年に制定され、農業、商業、工業等の業務に精励し、他の模範となるような技術や事績を有する方に授与されます。金井教授への伝達式・陛下拝謁は、11月26日に行われました。

金井勇一郎教授

ウクライナからの留学生による、同国復興を見据えた リサイクルコンクリートの研究展示を実施

東京ミッドタウン・デザインハブにて開催された「デザインの風が最初に触れる場所」展にて、プロダクトデザイン研究室に在籍するウクライナからの研究員アリサ・チェンさんによる「リサイクルコンクリート ～ウクライナにおける建築廃材のリサイクル研究」が展示されました。
アリサ・チェンさんは、激化するウクライナ紛争の復興を見据え、破壊された建築瓦礫をリサイクルする方法を何とか構築したいと、本学の支援プログラムに応募され2022年に研究生として来日しました。2024年より本学の研究員として研究に取り組んでいます。
リサイクルコンクリート技術は、東京大学生産技術研究所の酒井雄也准教授の開発したディープ・テックで、建築瓦礫を砕いて粉状にし高圧で固め直すことで、もとのコンクリートと同程度の強度が地球環境に少ないかたちで製造できます。アリサ・チェンさんは、このリサイクルコンクリート技術に、東日本大震災で培われた東松島市の災害瓦礫処理のノウハウを組み合わせて、ウクライナの復興に向けたロードマップと、未来ビジョンを描いています。今後の循環型経済の都市計画におけるリサイクルコンクリートの活用推進につながる取り組みです。



ウクライナの建物から取り寄せられたコンクリートの瓦礫とリサイクルコンクリートブロック

米国アートセンターとの国際協働教育プログラム “Pacific Rim 17th”の最終発表会を実施

アメリカ有数の美術大学であり本学協定校であるArtCenter College of Designと2006年より実施している、国際協働教育プログラム「Pacific Rim」の最終発表会が、2024年12月5日にアートテークギャラリーにて開催されました。Pacific Rimでは、両校で学ぶ学生たちが、高齢化問題から日本の伝統工芸まで、グローバルかつローカルなテーマを取り上げ、デザインが果たすべき役割について探究し、革新的な解決案を提示していきます。17回目となる今回は、「Healing Light - 癒しの光」をテーマに、日本における光と影に対する深い理解と最先端技術、生体リズムを意識したデザイン、空間に自然の要素を取り入れるデザインなど、癒しの要素を含むデザインについて研究を行いました。

学生が制作した作品を展示している様子

日本郵船との産学共同研究として すてるデザインの共創プロジェクトの第二弾を始動

本学と日本郵船株式会社は、包括連携協定を締結し、2023年度には産学共同研究の取り組みをスタートしました。第一弾のプロジェクトでは、大型船舶の運航を支える「船員のウェルビーイングの実現」というテーマに対し、デザインの持つ創造的な力を生かした船員のユニフォーム開発に取り組んできました。第二弾のプロジェクトでは、「Cozy・Comfy ～働く／暮らしの中にある喜び」というテーマに、生産デザイン学科プロダクトデザイン専攻studio3の学生たちが取り組みます。サステナブル社会の実現に向け、デザインの力を生かした新たな価値創出や課題解決に引き続き共同で取り組んでいきます。

共同研究キックオフミーティングの様子

美大生×官僚による共創ワークショップ活動報告 アートで社会課題に挑戦

2024年9月22日、東京ミッドタウン・デザインハブにある、多摩美術大学 TUBにて美大生×官僚の共創デザインラボによる、「第9回共創ワークショップ 公開デザインプレゼンテーション」が開催されました。共創デザインラボは、2020年に美術系大学生を中心とした学生と官僚有志によってスタートしたデザインコミュニティです。第9回目となる今回のワークショップでは、学生たちはフィールドワークとして経済産業省やデジタル庁を訪問。官僚の働く現場を見学し、省庁の考え方を伺ったり、官僚の皆さんとワークショップを行い、美大生と官僚が課題を共有しながらアイデアを出し合いました。

学生によるプレゼンテーションの様子

プロダクトデザイン1年生が イベントクリエイション課題成果展を開催

生産デザイン学科プロダクトデザイン専攻1年生による展示企画が2024年12月21日、八王子キャンパス・アートテークにて開催されました。（展示タイトルは「AROUND」）本展示は1年生の年末の集大成としてグループワークで行った課題の講評も兼ねています。今年のテーマは「ゾートロープ」日本語では「回転のぞき絵」と呼ばれる視覚玩具です。ドローイングスキル、ストーリー構築力、機構の設計と構造の理解力さらにはチームビルド能力を養うことを目的としています。当日は来場者にプレゼンテーションと実演をし多くの方に楽しんでいただきました。さらには来場者のおもてなしとして企画・運営も学生が考え、会場では来場者にオリジナルデザインのクリスマスプレゼントなども配られました。

休日の開催にもかかわらず、会場にはたくさんの来場者が訪れた

留学生との親睦を深める秋の国際交流パーティー開催

例年春と秋に開催される留学生との親睦を深める国際交流パーティーが、2024年11月15日、八王子キャンパスのTAUホールで行われました。これは国際交流センターの主催によるもので、語学の勉強や留学の相談などで日頃から国際交流センターを活用している学生有志の運営により開催されました。当日は100名を超える八王子、上野毛両キャンパスの学生が参加し、軽食を取りながらゲームなどを楽しみました。

国際交流パーティーの様子

テキスタイルの役割と可能性を探る展覧会を開催

テキスタイルデザイン３年生（スタジオ3）による展覧会「Hands and Knots つなぐテキスタイル」が、東京日仏学院（アンスティチュ・フランセ東京）にて開催されました。本展は、テキスタイルの社会における役割と表現の可能性を探るプロジェクトです。急速なデジタル化の影響から見過ごされがちな、「見る触る」「手で作る」「古いもの新しいもの」「人と人とのつながり」これらのことを軸に作品制作を進めました。

展覧会風景

JVAフェスタ2024に劇場美術デザインの学生が出展

劇場美術デザインコースの2年生26名が「JVAフェスタ2024 美事祭」に出展しました。今回の展示では、授業で制作したエンターテインメント番組の美術設計や模型を公開。実在のアーティストや楽曲を題材に、時代背景や社会状況まで深く研究し、パフォーマンス中のアーティストの動線や照明計画に至るまで、音楽コンテンツを総合的にデザインしました。

学生が制作したスタジオセットのイメージデザイン

「教養総合講座B」に内藤廣学長が登壇

「教養総合講座B」第一回授業に、内藤廣学長が登壇。講義の前半では、学生時代を経てスペインに渡った後の建築事務所での経験について語られました。次いで、シルクロードを東上しながらの放浪、帰国後のキャリアについても触れました。後半では、東日本大震災の被災地である陸前高田での復興支援を通じた気づきや思いが語られ、本学学長として聴講する学生たちへ期待のメッセージとエールが贈られました。

学生に語りかける内藤廣学長

マルセル・デュシャンのレプリカをめぐる国際シンポジウムを開催

多摩美術大学アートアーカイヴセンターと国立アートリサーチセンターは、第7回多摩美術大学アートアーカイヴシンポジウム・NCARシンポジウム004「マルセル・デュシャン《大ガラス》レプリカをめぐって――ストックホルム・ロンドン・東京・パリ」を、八王子キャンパスにて開催。レプリカの視点からマルセル・デュシャンの代表作を見直し、その特性やアーカイヴ化の意義、今後の活用アイディアを提案しました。

野田秀樹名誉教授による第二回特別ワークショップを開催

演劇舞踊デザイン学科は、大学と演劇界のプラットフォームの役割を果たす取り組みとして、野田秀樹名誉教授による特別ワークショップを開催。同ワークショップは、野田名誉教授が専任教員として在籍した期間に正規授業として開講してきたものです。2回目の開講となる2024年も、演劇舞踊デザインの学生だけでなく、舞台経験のある学外の方も受講可能なワークショップとして実施しました。

野田先生と受講生の様子

Apple MacBookのCMにアニメーションサークルが出演

アニメーション制作サークルの「studioJACA」が、Apple MacBookのCM「学生にMac」に出演しています。Macの多彩な機能を駆使してクリエイティブな制作活動を行う大学生に焦点を当てた本CMは、2025年新年より地上波、SNS、YouTubeなど、様々な媒体で公開されています。ぜひご覧ください。

本学が連携する「山梨デザインセンター」開設

山梨県は2024年11月20日、デザイン推進の新たな拠点として「山梨デザインセンター」を甲府市の県庁舎にある防災新館２階に開設しました。同センターは、県立美術館（同市貢川）の付属施設として設置する全国で初めての試みで、デザインの力で地域活性化や社会課題の解決を図ることを目的としています。20日に開催したオープニングイベントでは、主催者挨拶やトークセッションが行われ、関係者など約100人が出席しました。

訃報

野口裕史 名誉教授

1978年～
非常勤講師

1981年～
美術学部デザイン科立体デザイン専攻講師

1989年～
同助教授

1998年～
同教授
美術学部工芸学科教授

2020年～
名誉教授

2024年11月23日
逝去　74歳

カリピッポ 客員教授

2004年～
客員教授

2024年12月30日
逝去　79歳

八田雅博 客員教授

2004年～2016年
非常勤講師

2017年～
非常勤講師

2018年～
客員教授

2025年1月18日
逝去　76歳

五十嵐威暢 名誉教授

1968年～1970年
美術学部デザイン科
グラフィックデザイン専攻副手

1989年～
美術学部二部デザイン
学科教授

1993年～
客員教授

2011年～
学長

2015年～
名誉教授

2025年2月12日
逝去　80歳

謹んでお悔やみ申し上げ、ご冥福をお祈りいたします。

Up & Coming

Up & Comingは卒業生の発表活動を支援し、新しい表現を発信するオルタナティブ・スペースです。アーティストの自己プロデュースによる企画展によって、多くの人びとへ創造のよろこびを伝え、新たな時代精神を生み出す場となることをめざしています。

渋谷区神宮前3-42-18｜12:00〜19:00（金曜・土曜は20:00まで）｜火曜休場｜入場無料

2/23（日）ー3/30（日）

言ったことない息

何かを作ることで、言い得なかったことによる息苦しさを解消しようと格闘する3名の作家による展覧会。

出品作家＝栗田平手、詩霖、矢野紗季

4/4（金）ー5/12（月）

花へ、ふたたび問ふこと。

作家としての姿勢や精神的な支えとして尊敬する女性作家の存在を念頭に置きつつ、表現の根本的な意識を探ることをテーマとした展覧会。

出品作家＝曽田萌、高野真子、宮林妃奈子、山口彩紀

5/16（金）ー6/22（日）

切れはしの交換

生成AIの台頭する現代に「なぜ」「何を」描くのかという問いを追求する。作家同士が言葉の切れはしを交換し、受け取ったものを起点にした作品を発表。

出品作家＝長谷部まり杏、石河彩子、WAKO

アートテークギャラリー

八王子キャンパス内｜ギャラリー開場時間10:00〜17:00（展覧会による）｜日曜・授業日以外の祝日休場｜入場無料

＞ 最新情報は大学HPでご確認ください

3/31（月）ー4/12（土）

堀内正弘 退職展

5/28（水）ー6/5（木）

台湾現代文様芸術

ー台湾原住民文様の記録と創造ー

6/2（月）ー6/14（土）

彫刻学科基礎実技石彫実習

ー時間と形象ー「石がかたちになるとき・実践編」Vol.2

多摩美術大学 アートアーカイヴセンター

本学に蓄積されてきた芸術資源を保存・管理・公開していく研究教育拠点として、2018年4月に設立されました。現在18の資料体を有し、授業での利用や、制作および研究に役立つ生きた教材とするため、各種資料を整理してアーカイヴを構築しながら公開しています。利用方法はウェブサイトをご覧ください。

後期：4/1（火）ー5/17（土）

多摩美術大学アートアーカイブセンター所蔵資料展6

「《大ガラス東京ヴァージョン》ガラススタディ アーカイヴ展」ガイドツアー／ミニトーク

AACギャラリーにて所蔵資料展を5月17日まで開催中です。関連イベントとして、本学の学生および教職員向けのAAC案内も含めたガイドツアーとガラススタディに関するミニトークを開催いたします。

【ガイドツアー】期間：4/21(月)— 25（金）各日1回（12:30〜）所要時間20〜30分程度
【ミニトーク】　期間：5/14（水）— 16（金）各日1回（12:30〜）所要時間20〜30分程度

6/23（月）ー7/20（日）

多摩美術大学アートアーカイブセンター所蔵資料展7

「三上晴子アーカイヴ：活動年表資料展」

2015年に急逝した、三上晴子の作家活動・多摩美術大学での教育活動が一覧できる活動年表のプロトタイプを制作しました。その時に整理した、DM、フライヤー、カタログなどの資料を、年表と紐付けながら紹介します。作品の周囲にある痕跡を通して、さまざまなメディアを横断した三上の活動の軌跡を追うとともに、時代背景や美意識の変遷を垣間見ることができます。

三上晴子活動年表

10:00〜17:00（7月19日・20日は16:00まで）｜休場：日曜日（7月20日(日)を除く）｜入場無料
監修：三上晴子アーカイヴ研究（久保田晃弘・石山星亜良・堀口淳史）

多摩美術大学 TUB

“まじわる・うみだす・ひらく”をコンセプトに、オープンイノベーションによる価値の創出、幅広い層に向けたデザインやアートのプログラムの提供、学生作品の展示・発信を通してデザインとアートの持つ創造性と美意識を社会とつなぐ場を提供しています。

港区赤坂9-7-1ミッドタウン・タワー5F（東京ミッドタウン・デザインハブ内）｜11:00〜18:00｜日曜・月曜・祝日休場｜入場無料

3/27（木）ー4/6（日）

ポケモンと考える アート・環境教育展3

今年も「ポケモンと考える アート・環境教育展3」を東京ミッドタウン内の多摩美術大学 TUBにて開催いたします。会場には生産デザイン学科プロダクト専攻Studio3の学生たちが身の廻りのものから作ったポケモンが70体以上並びます。サスティナブルな社会に向けての、環境問題についての意識醸成が行われればと考えています。期間中には、小学生を対象としたワークショップも行われます。

5/19（月）ー6/21（土）

ゼミ展

「ゼミ展」は、様々な領域のデザインを扱う全国の教育機関のゼミやクラスで取り組まれている課題内容と作品の展示を通して、社会の中で今どのようなデザイン／デザイナーが必要とされているのか、これからデザインの最前線に出ていく学生たちが、どのように課題に向き合っているのかを紹介する展示企画です。今年は多摩美術大学とArtCenter College of Designの共同プロジェクトであるPacific Rimが参加します。

EXHIBITION & THEATER

3/11（火）ー3/16（日）

9:30-17:00（最終日15時まで）
茨城県つくば美術館

乾漆の造形 皮膜と身体
-漆芸と彫刻のインターセクション-
3/16（日）11:00〜
講演：「工芸史から見た現代作家の表現としての漆の可能性」
リベラルアーツセンター・外舘和子 教授

3/11（火）ー6/8（日）

国立西洋美術館

西洋絵画、どこから見るか?
ールネサンスから印象派まで
4/5（土）14:00-15:30
講演：「18世紀フランスの女性芸術家たち：マリー＝アントワネットの時代の美」
リベラルアーツセンター・小林亜起子 専任講師

3/19（水）ー3/24（月） 土日休廊

台湾新北市・輔仁大學織品服裝學系ギャラリー

台湾現代文様芸術
—台湾原住民文様の記録と創造—
（科研費国際共同研究強化（B）成果報告）
リベラルアーツセンター・深津裕子 教授

4/4（金）ー4/13（日）

井政（神田の家）
「まだない生活」
工芸・塩谷良太 准教授

4/10（木）ー4/19（土）

俳優座劇場

「嵐　THE TEMPEST」
演劇舞踊デザイン・加納豊美 教授
（衣装プランナー）

4/18（金）ー9/23（火・祝）

TOKYO NODE 45F TOKYO NODE GALLERY A/B/C

デザインあ展neo
統合デザイン・中村勇吾 教授

5/10（土）ー11/23（日）

ジャルディーニ地区、アルセナーレ地区、他ヴェネチア市内各所

「第19回 ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展」
芸術学・家村珠代 教授（日本館キュラトリアルアドバイザー）

7/12（土）ー9/15（月・祝）

パナソニック汐留美術館

ピクチャレスク陶芸
アートを楽しむやきもの—「民藝」から現代まで
工芸・尹熙倉 教授（出展作家）

BOOK

ヴェルサイユの祝祭
小穴晶子 著（名誉教授）
春秋社
2024年7月12日刊
2,970円（税込）

続　おいしい景色
皆川明著（テキスタイルデザイン教授）ほか著
スイッチ・パブリッシング
2024年11月1日刊
2,200円（税込）

映画で味わう中世ヨーロッパ：歴史と伝説が織りなす魅惑の世界
金沢百枝（芸術学教授）ほか著
ミネルヴァ書房
2024年12月1日刊
3,300円(税込)

武田鉄平作品集「FLOWERS」
深澤直人・デザイン（副学長）
ユナイテッドヴァガボンズ
2024年11月30日刊
5,500円（税込）

建築断面 矩計図集
内藤廣（学長）ほか著
グラフィック社
2月10日刊
3,850円（税込）

小学館の図鑑ＮＥＯアート はじめての国宝
青柳正規 監修（理事長）
小学館
2月19日刊
2,970円（税込）

「TAMABI NEWS」では受賞や活動報告を募集しています。

＞ メール（news@tamabi.ac.jp）あるいは右のQRコード「受賞・活動報告 投稿フォーム」からお知らせ下さい。

Tama Art University
多摩美術大学 広報誌「TAMABI NEWS」2025年3月18日発行　第33巻　第3号　通巻100号
発行：多摩美術大学 広報部 東京都八王子市鑓水2-1723
お問合せ：https://www.tamabi.ac.jp/contact/kikaku/（広報課）